箱

dousojin

ご挨拶

この度はページを開いて頂いてありがとうございます。
読み終えて　「なんなのこれ？」　と思っていただければ幸いです。

はじまり

神話の時代、女神パンドラは神より一つの箱を預かった。開けてはならぬと言われたその箱の蓋を彼女は開けた。
女神といえど自分自身の心の中に芽生えた誘惑に勝つ事が出来なかった。その結果、箱に閉じ込められていたありとあらゆる災い・・悪・・が世の中に飛び出した・・・・。

これは有名な「パンドラの箱」の一節であるが・・さて、これを読んでいる君、ここで君にも女神パンドラになって頂く事にする。

何？嫌だって？

そうはいかない、ここでは君の意見など取り入れられはしないのだ。どうしても嫌だと言うのなら直ちにこのページから立ち去りたまえ。方法はそれしかない。

さあ早く！これ以上進むと君はもうこれから逃れる事が不可能となるのだ。

さあ今すぐに！早く！

あ、ああ・・もう手遅れのようだ。ほら見たまえ、向こうから男がやって来る。大事そうに箱を抱えて。
ほら、ゆっくり一歩一歩近づいてくる。
君、今なら、あるいは今なら逃れる事が出来るかもしれない。
さあ早くこのページから・・・ダメだ！君の瞳はもう男に釘付けになっている、もうダメだ。君はもう逃げられなくなった。

ふっふっふ・・もう逃げれられなくなったのだ・・・・。

うけとる

それにしても妙な男だな、何故あんなにゆっくり歩いているんだろう？見たところ若そうな男なのに。

え？何故若そうなんて分かるかって？

よく目を凝らして見てみたまえよ、あの箱を持った手を。皺一つない、あれは若い男の手だ。

え？なに？じゃあ何故あんな老人のように歩いているのかって？

こっちもそれを聞いているんじゃないか、全く・・。

なんて言ってるうちに間近に来たぞ。
あ！血だ。そうか、奴は怪我をしているんだ。片方の腕で腹をおさえているぞ。どうやら大変な怪我らしいな、指の隙間から血が漏れている。
痛さに顔を顰めながら、それでも一歩一歩近づいて来る。
君、顔が青いよ、身体も心なしか震えて・・逃げ出したいかね、ここから？ん？ああ、足がすくんでもう動けないのか。
残念だったね。

ああ、奴はもう君の目の前に来てしまった。ほら、何か言っているじゃないか。聞き取れるかね？・・無理のようだ、あ、奴が箱を差し出した。
君、受け取るかね？それとも知らぬ顔をするか・・・・。
おやおや、やっぱり箱を受け取ったな。

え？私が受け取れと言ったって？

いやだな、私は何も受け取れなどと負った覚えはないぞ。
君が自身の意思であの男から受け取ったのだ。おや、そう言えばあの男は何処へ行ってしまったのだ？姿が見えないぞ・・・・まぁいい、それより、その箱一体何だろうか？
灰色で鍵穴らしきもないから簡単に開きそうだ。
ねぇ君、そうは思わないかね。

え？

ほほう『開けるな』と書いてある。これはいい、正に君は今、女神パンドラになったのだよ！

さあ、これからだな、君が自分自身の心の誘惑と戦うのは。うふふ・・楽しみだねぇ。

は？なんだって？こんな箱気味が悪いから捨ててやるって？

ふ～ん、まぁそれも結構だ。君自身が受け取ったのだしね。
でもその中身は高価な宝石かもしれない、またあるいは見たこともない大金かも・・・
もっとも君は必ず捨てると決めているようだからそんな事がどうでもいいか、さあ捨てたまえ、
君の側に都合よくゴミバケツがあるじゃないか、さあ・・・
おや？止めたのか？ほう、手提げ袋にしまった。持って帰るのだね、それは良かった。
実を言うとね、君に箱を捨てられたら困る所だったのさ。

なぜ？

そりゃこれより先がつづかなくなくなるからさ。君は私と共にこの話の大事な登場人物だからね。
お、おっと！怒らないでくれたまえ。

あ、ああ、ちょっと待ちたまえ。私を置いて行かないでくれたまえ。

お～い、君～。

ふつかめ

やあ君、あれから二日経ったが・・ほう、感心感心。まだ蓋を開けてはいないようだね。机の上にきちんと乗せてある。
でも、どうかね？そろそろ気になりだしたのではないかね？

何がって？

中身だよ、箱の中身。宝石か大金か、あるいは神話のように災いか・・知りたいだろう、気になるだろう？

え、なんだって？全然気になりはしないって？

・・これはこれは。笑みまで浮かべて余裕じゃないか。まあまだたったの二日だし、私としても君が頑張ってくれたほうが楽しいがね。
でも明日あたり、いや明後日辺りにはきになってしょうがないなんて事になるかもしれないが・・

おや、鼻で笑ったな。

まあそれもいいだろう、今のうちにたっぷり笑っておく事だ。

そのうち笑うどころか泣き出すかもしれないから・・おっと、また怒らせる前に私は失礼するとしよう。

今度私が来た時も笑って迎えてくれたまえよ、ねぇ君。

いつかめ

今日で五日目だな。

どうかね？まだ箱の中身は気にならないかね？

何？ち～っともだって？

ははは・・君、強がりは止めたまえ、そんなものは一文の得にもならないから。

あ？強がりなんて言ってないって？

ほほう、では聞くが箱に付いている指紋はどう説明するのかね？
いやいや、隠しても無断だ、箱の蓋の所にくっきりと君の指の跡がついているじゃないか。
どれどれ・・ふ～ん、この様子じゃ何度も手に取ったようだな、蓋だけじゃない、いたる所に指の後がついている。どうかね、図星だろう？
あはは・・そう無理に笑わなくてもいいよ、口許が引き取っているじゃないか。おや、背を向けたか、ふむ、どうだい、この際思い切って開けてみては？
ねぇ、どうだい？お、おい、本を投げつけるのはやめてくれ！

え？開けないと言ったら開けないって。

そりゃ君がそう言うのなら。でもあまり意地を張っていると身体にも悪いぞ、ねぇ君。
お、おい！そんなに怒らないでくれたまえ！別に私は・・・・分かった！分かったから止めてくれ。私はボール当ての鬼ではないんだから、おい！

ふう、イタタ。二・三冊頭に当たったぞ、全く・・。でもね・・おっと、分かった。もう何も言わない、だから本は止めてくれ。

え？じゃあ帰れって？

ふむ、仕方が無いな。それじゃあ私は帰ることにする。でも本当に、あまり意地を張らない方が良いと思うぜ。それに、中身は案外つまらないものかもしれないしね・・・。

ようかめ

今日で八日目か。

ああ、大分やつれてしまったようだね。
・・・そうか、夢にまで見るのか。それで熟睡出来ないのだね、可哀想に
ねぇ君、もう開けたら？

なに？お前がこうなるように仕組んだんじゃないかって？

そ、そりゃそうだが、まさか君がそんなに思いつめるなんて考えてもいなかったのだよ。
これ以上意地を張ったら本当に身体がやられてしまう。ねぇ、開けてしまおうよ、ね。

え？ここまできたら死んでも開けないって？

ふう、君ねぇ、おっ！まあそんなに怒鳴らなくても。私は君の事を思って言っているんだよ。本当に病気になってしまったらどうするんだ？

え、うるさいって？

だがね・・確かに受け取ったのは君なのだし、開けようが開けまいが君の勝手さ。でもたかだか箱一つじゃないか。

え、いままでと言ってる事が違うじゃないかって？

仕方がないだろう、さっきも言ったがまさか君がそんなに思いつめるなんて思わなかったし・・
ああ、目にクマまで作って・・ねぇ頼むからもう開けようじゃないか？さあ。
・・っとねぇ返事をしてくれ。な、開けるって言ってくれ！

え？何条件がある？

いいとも、言ってくれ。

ふむ、中身を教えてくれって？もしも危険なものだったら困るからって？

・・ふむ・・君の身体の事を思えば中身が何か教えたいのやまやまなのだがね、

何？勿体ぶらずに言えって？

・・・実は私も知らないのだよ。え嘘？じゃないとも、本当さ、本当に知らないのだよ。
ああ、そんなにがっかりしないでくれよ。な～に。危険なものは入ってはいないさ、何故って、ほら、こんなに軽いじゃないか。お、おい、離してくれ。

え何？揺するんじゃないって？

分かったよ。そんなに血相を変えて言わなくとも・・・はいはい、ほら、きちんと机の上に置いたろう。
・・・で、どうする気だ？えっやっぱり開けないのか。分かった！もう何も言わんよ、自分自身で決めたまえ。
・・・じゃあ私はこの辺で失礼することにする。くれぐれも身体にだけは気をつけてくれたまえよ。

ねぇ君。

やあ、部屋に居ないから心配したよ。病気になって医者にでも担ぎこまれたのではないかと思った。
で、今日は何をしているのかね？そんな所に穴を掘って。
あ、箱もある。そうか、埋めてしまおうというのだね？それはいい考えだ。もう二週間にもなるものねぇ。

なに、目のつくところにあるとどうしても手が出るって？

そうか・・・それもまぁ、埋めてしまえば大丈夫だろう、もう少し深く掘ったら？そのくらいじゃ直ぐに掘り出してしまうだろう。
そう、そのくらいだ、そこに箱を・・ほう、厳重に紙で包んで。ふむ、縄で縛ってかね。
それを穴に入れて、土をかけて・・・よ～く踏み固めて。

・・・・よし！もう大丈夫だな。二週間か、君はよくがんばったよ。私も脱帽だ。
君も十分パンドラの気持ちが分かっただろう。
おや、やっと笑ったね、ひさしぶりだな、君の笑顔も。今日はゆっくり眠りたまえ、明日にはもうその目のまわりのクマも消えるだろう。

え？なに？

い、いやいや、私の事は心配しなくてもいい、これ以上話が進まなくても構わないさ。それより君が病気にでもなっていたら・・
なにせ、このゲームに引き込んだのは私だからね。
本当のことをいえば今でも箱の中身が気になっているんだがね。まあその内誰か、そう、君以外の誰かがが開けてくれるだろう。
それまで待つことにするさ。
え、なに？ひとつ質問がある？
いいとも、ひとつといわずなんでも尋ねてくれ。

うん、なんだって？何故私が自分で箱を開けないかって？

それはねぇ、いや別に高みの見物を決め込んでいる訳じゃない。私では箱を開けられないのさ、

嘘だろうって？

嘘じゃない！箱に触る事は出来るけれど開ける事は出来ない、本当さ。
おいおい、そんな疑いの目でみないでくれ、本当の本当さ！信じてくれ！

え？信じてくれる？そうか！

・・・え？そうじゃない？信じたわけじゃないけれどもう自分には関係がないことだからどうでもいいって？
・・・ふむ、まあ仕方がないか。じゃ私ももう君とは関係のない奴ってことになるわけだし、帰るとしようか。

それにしても君、まあゆっくり眠ってくれ、箱の事もはじめにあった男の事も忘れてね。

やあ君、久しぶりだね。

君があの箱を生めてから一週間、あの傷を負った男から君が箱を受け取って三週間になる。
どうだい、身体の方はもう元に戻っただろう。
おや？どうしたんだい元気が無いじゃないか。
あれ？机の上にあるのは・・・あの箱じゃないか！掘り返してしまったのか？
何故？
一体・・やっと箱を開けようとする君自身の心の誘惑から解放されたのに。
え？なんだって？
声が小さくて聞こえないよ。

なに？今度は箱を開けるかもしれない誰かの事が気に掛かって眠れないんだって？自分があの場所に箱を埋めたせいで他人に危害を加える事になるかもしれないと思うと心配でって？

ああ、君って人は・・・誰とも分からない人間の為にそんなになやむなんて。それでわざわざ掘り返してきたって訳か。
何も誰かが必ず掘り返すって事も無いだろうに。そのまま埋もれて二度と人目につかないって事もあるだろう。

え？やっぱり自分が受け取った物だし、自分が責任を取る必要があるって・・か。

ふむ、それでどうするつもりだ？掘り返して・・・開けるのか？それとも今度は焼くか、それとも・・
なに？この部屋に置いておくって？
ずっと？おいおい、今度こそ病気になってしまうぜ。

え？だったら私に持ってゆけって？

そ、それは困る！困るよ。あ？冗談だって、誰にも渡したりしない？ふう、ちょっとびびったよ、今のはね。
・・・で随分立派な事を考えたわりには浮かない顔だ。やっぱり気になるんだな。
ああ、頷いたね。
よし！私も君に協力しよう。

えーっ！！

ってそんなに驚かなくてもいいじゃないか。
確かに最初の内はなにかと言ったさ、でも、君を見ていたら気が変わったのさ。
ねぇ、私にも協力させてくれないか？

そうか、ＯＫか。

う～ん、そうだな、箱はずっとこの部屋の机の上にあるんだからね～。
よし！じゃあこう考えてみたらどうだろう。

なにかって？

この箱をさ、開けたら世界が破滅すると考えるんだ。まあまあ、最後まで聞いてくれ。
いいかい、例えばだよ、この箱の中に、そう、あのパンドラの箱のように災いが入っていると思えば・・パンドラだって災いが入っていると知っていたら自分から開けることは無かったろうさ。
何が入っているか分からないから気になるのさ、だろう？それに世界が君の気持ちひとつに掛かっているなんてちょっといい気分だろう。
おや？ちょっと不満そうだね。
じゃあ君は何かいい考えがあるのかい？ない？
・・・みたまえ、この方法が一番だよ。開けたくなったら心の中で思い浮かべるんだ、世界が滅びる様をね。
そうすればまぁ暫くの間はもつだろう。それでも我慢が出来なくなったらまた別の方法を考える事にしようよ。
ねぇ、そうか、やってみるか。なに大丈夫、二・三日もすればあの箱なんて置物のひとつ程度にしか思わなくなるさ。
ん、やる気になったな。
そう、君なら大丈夫だ。うん、絶対にね！では頑張って！

さんじゅういちにちめ

どうかね？あれから十日過ぎたな、ほう、顔色もよくなったじゃないか。うまくいっているようだね。
え？あんまりうまくないって？
何故さ、目のクマもなくなっているし、よく眠れるんだろう？
お、おい、そんなに怒鳴らないで。そう、落ち着いて話してみたまえ。

ふむ、最初の一週間は良かったって？

確かに四日目くらいには箱の存在も気にならなかった。
うん、それで？
ところが気分が落ち着いてふと周りを見渡したら？

ふむ、世の中があまりにも・・・ふむ、新聞を見れば戦争だのクーデターだのと騒いでいるし？
なに、この国はこの国で殺人だの交通事故だのと死亡記事が載らない日はないって？
それで？自分がもし本当に世界を背負っているなら、箱を開けてこの愚かしい人類を滅ぼしたくなってくるって？

・・・君って人は。どうしてこうつぎからつぎへとつまらない事を考えるんだろうかね。
そりゃ、そうやって世の中を憂う気持ちは大切な事だよ。だが、私が言ったのはあくまで仮定だよ。
君が箱を開ける事によって世界が滅んでしまうなんて事はないさ。

え？それじゃあ矛盾してしまうって？

ああそうか。そうなるのか。
・・・じゃあそれでまた箱が気になりだしたというわけなんだな。ふむ、困ったな、今度はどうするか・・・おい、君も考えろよ。

なに？考えてるって？

本当か？妙な顔をして。え～と、ん？どうしたんだ？何が可笑しいんだ。

なに？君より・・ふむ・・私の方が夢中になっているようだって？

う～ん、言われてみれば・・・。何故だろうかね、私にも分からないがね。・・・ま、ともかく次の方法を考えようか。
う～ん、お、そうだ。今度はこうしたら？箱の蓋を開けると君がこの世から消え去るのは・・・あ～ダメだな、世界全人類を滅ぼそうなんて考えるくらいだからな。
え～っと、じゃあ開けると君の嫌いなモノがワンサカ出てくるとか。あ、いやいやこれも弱いな。
えっと・・おい、考えているのか君。ちゃんと考えてるって？どうもね、その笑い顔を見ていると・・・。
う～ん、何かないものか・・・う～ん。

トントン・・ん？なに？

今一生懸命考えているんだ邪魔をするなよ。

トントン・・って、おい！私は君の為・・・え、なに？自分で・・ほう・・何とか考えるからって？で？・・・私に・・・今日は帰れって？

随分だな、私は君の為にだねぇ。

え？私が苦虫を噛み潰した顔で考える必要はないからって？

ふむ、まあそうだけれど。・・・・分かったよ、君がそう言うなら今日のところは帰ろう。
また二・三日したら様子を見に来る事にするよ。

じゃ、また。

あける？

や、元気か？

おや、今日はいつになく明るい顔をしているな。

なに？多分私が今日来るだろうと思って？・・・ふむ、ケーキを買ってあるって？

それはそれは。気を使わせてしまってすまないね。あ、紅茶までいれてくれたりして・・・はははは、なんだか嬉しくなってきた。
うん、このケーキはなかなかだ。

え？当たり前だって。高かったんだから？

へぇ、それはどうも。見も知らずの私の為に。
・・・ところで例の箱は？ああ、まだ机の上にあるな、勿論開けてはいないんだろう？
それにしては妙に明るいじゃないか？ついこの間までは今にも倒れんばっかりの状態だったのに。
え？そんなのはもう過去の話さって。
おやまあ、よっぽど上手い方法を考えついたようだな。満面に笑顔を作って。あの目の周りにクマを作っていた君とは別人のようだ。
ずっ。
うん、この紅茶も旨い。今まで私も色々な人間に会ったがね、お茶やケーキでもてなしてくれたのは君は初めてだ。
・・・・で、教えてくれるんだろう？なにがって？君の考えた箱を開けないための方法をさ、君も私に話したいのだろう？
ねぇ、勿ぶらずに。ねぇ君ったら。

ん？その猫なで声は止せって？

あ、ああそうだな。どうしたんだろう、だんだん言葉遣いがヘンになってきている。いかんいかん、私は常に威厳に満ちた態度でいなくては。ケーキなど食している場合ではなかったのだ。
おほん、ではもう一度君に尋ねるが、どんな方法を考えたのか私に教えてほしい。おい、どうしたのだ急に背中をむけたりして。君？
お～っと、急に笑い出さないでくれ、なにがそんなに可笑しいのだ。

え？急にカッコ付け出したからだって？

うむむ・・・。とにかく！いつまでも笑っていないで教えてくれたまえ。お、急に真面目な顔になった・・

なに・・心して聞いてくれって？

ごくり。よ、よし分かった。・・服装の乱れを正してと。
よし、話してくれ。どんな方法なのかとっても興味があるからな。どうやって中を見たいという衝動を抑えているのか・・・

え？なに？今なんと言った？箱を開ける事にしたって？

おいおい、いいのか？中は何か分からないんだぞ、もし不用意に開けて君の身になにかあったら・・・

え？なに？本当に開けるわけじゃないって？

どういう事だ？
ふむ、いつでも簡単に開ける事が出来ると思う事で逆に箱に興味がなくなったって？
ふ～ん、そんなものかね。

なに？人間てのはそんなものだって？ふむ、それにパンドラだって神様からきつく空けるなって言われたから中がきになりだしたに違いないって？
ふ～ん、だからこのゲームは君の勝ちだって？

おい。ちょっとまってくれ、ゲームはまだ終わっちゃないぞ。

なに、もう自分は箱を開ける事がないから・・私に引き取れって？

ふふん、そうはいかない。私もここまで来て引き下がるわけにはいかないよ。 それに自信ありげな君をみているとどうしても箱を開けさせたくなった。

え？なに？酷い奴だって？

ああそうさ。なんとでも言ってくれ、私は酷い奴なんだ。

・・・・怒ったのか？

なに、帰れって？もう二度と来るなって？

そうはいかん、今日のところは帰ってやるが。だがまた来る。
いいか、私はどんな手を使っても絶対君に箱を開けさせる！
おっと！本を投げるのは止めてくれ。分かってる、今日のところは・・分かった、帰ればいいんだろう、帰れば。

でもね、君覚悟しておきたまえよ、私はまた来るからな。

あけない！

やあ元気かね？

君、ねぇ君。ふ〜ん、無視ですか。まだこの間のことを怒っているんだな。
でも安心したまえよ君、今日は箱の話をしに来たわけじゃない。ねぇ君こっちを向いてくれ、おい。・・・ふむ、では耳だけ貸してくれればいい、面白い話を聞かせてあげるよ。
・・君も知っているかもしれないが、『夕鶴』というんだがね。
・・・昔々・・この類の話は何故昔々ってはじまるのかねぇ・・ってまぁいい。昔々、一人の男が罠に掛かっていた一羽の鶴を助けた。
助けられた鶴は何度も例を言って去った。それからどのくらいたった頃だろう、男の家に美しい娘がやって来て・・男に一夜の宿を請うた。
翌朝その娘は一夜の宿のお礼にと男の家にあった古い機織り機を借りて反物を作ろうと部屋の一つにこもった。『決して開けないでください。』という言葉と共に。
娘はその日から連やあてがわれた部屋で美しい反物を織った。出来上がった反物は男が街へ売りに行き、それは高い値で売れた。
暫くはそうして娘と暮らすようになり・・そのうち男は娘がどうやって反物を織っているのか不思議でしょうがなかった。
そんな考えに取り付かれながらも数日は我慢した。
けれど丁度一週間、男は我慢に我慢をしたけれどとうとう誘惑には勝てず、娘が『開けないで』と言った部屋の戸を・・・
っていたい！！
本は止めろと言っただろう！なんだい怖い顔をして。私は君の気持ちをるリラックスさせよ
うと・・

え、なに？それは『鶴の恩返し』じゃないかって？

うふふ、まぁ、そうとも言うかな。
なに？男がその部屋を開けたお陰で鶴の化身でもあった娘が空へ帰ってしまう話だろうって？
その通り。良く知っているじゃないか。

そんな話をして自分にあの箱を開けさせようとしているんだろうって？

ははは・・。バレてしまったようだな。おいおい、そんなに怒るなって。君はまだあの方法で箱を開けないようにしているんだろう？
だったら私の話を聞いたって大したことはないだろうに・・・。おや、また背をむけたな。じゃ

あ私はもうひとつの話をするか。
今度はイザナギとイザナミの話だ。昔々・・・てこれは本当に昔の話だ。イザナギと・・・

なに？これも知っている？死んでしまったイザナミを死の国へと迎えに行ったイザナギが約束を破ってイザナミを見たってやつだろうって？

大当たり。意外と物知り・・・って。あ～あ、頭から湯気が出るほど怒っちゃって。

なに出て行けって？

嫌だと言ったら？ほう、今度は本じゃすまない・・・か。何を投げるつもりなんだ？鉛筆？ノート？それとも・・・
お、おい！その手に持っているのはカッターナイフじゃないか！や、止めたまえ。そんなものを振り回すのは。
あ、ああ、怪我をするぞ。・・分かった、わかったよ。

ふう、君ねぇ、刃物を振り回すってのは狂人のする事だぞ。ん？分かるか。少なくとも正常な人間はそんな事はやらないものだ。
私のやり方が気に食わないというなら君も頭をつかうんだな。お～っと。本当にカッターナイフを投げつけられるまえに失礼するか。
明日またやって来るからね。

いいかね、頭を使いたまえ、君のそのやや大きさ目のそれは帽子を乗せる台ではないんだろう？はははは・・・。

あ・け・た

ふふふ・・・おや驚いているな、まぁ少しは頭を使ったようだが残念だったな。いくら窓やドアを板で釘付けしようとも私は侵入できるのだ。

お、今度は耳栓に・・ほお、ヘッドホンか。私の話を聞かない様にか。

あはは・・・。無理無理、そんなことは何の役にも立たないよ。
いくら耳を塞ごうとも、私の声を消す事が出来ない。・・・だろう？不思議そうな顔をしているが、私は君の頭に直接語りかけているのだからね。そう、今だってそうさ。

おや、ヘッドホンを投げ捨てた、耳栓も外して・・・ふむ、私の向かいに座った。そうか、とうとう私私と面と向かって対決しようと言うわけか・・・・。

さて、今日は例のパンドラの話の続きをしよう。知っているかね？

なに？知らない？それはいいな。

・・・災いの詰まった箱の蓋を開けてしまったパンドラは慌てて蓋を締めた。これ以上はひとつの災いも外に出さないように。
すると、箱の中から声がした。『開けて、私を外にだしてください。』ってね。
パンドラはどうしたと思う？

二度と開けなかっただって？

と、思うだろう。ところがパンドラは再び開けたのさ、

なに？どうしてかって？

それは箱の中の声が言ったからさ、『私は災いではありません。私の名は希望。』ってね。
そう、箱に残った最後に一つは希望だった。希望・・・いい言葉じゃないか。

何だって？その話がどうかしたかって？

だから！私の言いたいには箱に入っているのは悪いものばかりじゃないって事さ。
だ・か・ら。

この箱の中もいい物かもしれないって言いたいんだろうって？

そうだ。最初に行ったように宝石とか、大金とか。

あ？この箱は軽いって？それに例え一万円札が入っていたとしてもこの大きさじゃ大金には程遠いって？

ふむ、では小切手なら、そうじゃなきゃ証券とか・・

え？それじゃあ勝手にお金に出来ないから価値はゼロだって？

むむむ・・では・・えっと・・宝のありかを書いた地図とかでは？宝のありかを書いた地図とかでは？ははは って笑う事はないだろう、宝の地図なら君の利益だろ。

なに？今の日本に隠された財宝なんてあるわけがないって？

いや、日本だけじゃなく外国かも・・。
外国まで探しに行くなんてバカらしいって？それにたとえ地図が入っていたとしても本物かどうかわからないのに探しに行く阿呆もいない？
ふ～む。なかなかやるな。自信ありげな顔をして。

開けさせる事が出来るのならやってみろって？

くそ！・・と失礼。君がこんなに意志の強い人間とは知らなかったな。
あの怪我をした男から箱を預かってもう一ヶ月以上たったが・・・いや恐れ入った。

おだてたって無駄だって？

いやおだててるわけじゃない、本当に、心の底から本当に感心しているのさ。 その心意気に敬意を表するという事で私も本当の事を言おう。

なにって？

箱の中身の事さ、実は私は箱の中が何か知っているのだよ。
お～っと、立ち上がってまで怒らなくてもいいじゃないか。君が私に泣きついたら教えてやるつ

もりだったのさ。
おいおい、まぁ落ち着いて、ほら座って座って。

・・そう教えるつもりだったんだ。けれどあんまり君が意地をはるからついこっちもね。ああ分かった、分かった、言うよ。
この箱の中身は・・・

早く言えって？ＯＫ。

実はその中には病原菌が入っていたのさ。
ははは・・・そう、病原菌だ。驚いたか？いや、嘘じゃない。君は当の昔に感染している。

身体はなんともないって？
そうかい。うふふ・・・本当にそう思うかな？君、この一ヶ月で随分痩せただろう、顔色も悪いし・・ははは。
青くなったな。思い当たる事があるだろう。ははは・・

なに、今から医者にって？

もう遅い、それに今の医学じゃ治療法はない！

なに？箱を開けたわけじゃないから感染しているわけが無いって？

君は細菌のサイズを知らないのか？こんな箱、鍵も掛かってないしね。
あははは・・そうだ、ついでに言うなら、その菌に感染すると長く生きても半年だ。

なに？それはお前も同じだろうって？

いや、私は大丈夫、なぜって私は人間じゃないからね。
ははは・・おや、汗かい？熱でも出たのかい？次は息遣いが荒くなってきたね・・そのうち目も見えなくなるだろう。
そして次は、耳だ、口も聞けなくなる。食べ物を摂れなくなって痩せる。
痩せて・・・そして死だ。
おっと、私に組みかかって来たってもう遅い！おや涙、泣いているのか？ははは・・・君はもっと早く私に泣きつくべきだったのさ！

なに？鬼だって？

ああいいとも、鬼でも死神でも好きなように呼んでくれ。

あ～あ、泣き崩れてしまって。泣いてる場合じゃないと思うぜ、君にはもう時間がない。
今の内にやりたい事をしておいたら？お、おい何をする！

え？箱を・・開けて菌をばら撒いてやるって？自分ひとりがこんな事で死ぬのは不公平だから？

あ～あ、人間てのは普段は奇麗事を並べているのに、イザとなるとこれだから。

なんとでも言えって？

まあ私には関係のない事さ。

お、箱を手にしたな、そして蓋を

・・・あ・け・た。

・・どうなった？

やあ、まだ生きているかね？
え？何故自分はまだ生きているのかって？
そりゃ病原菌がどうのなんて嘘だったからさ。ああ言えばあるいは君は箱を開けるのではないかと思ってね。
結果は私の思い通りだった・・君は自棄を起して開けてはならない箱を開けたのだ。

さて、中には何があったかね？今の君自身、あるいは周りををよ～く見てみれば分かるだろう？

さあどっちだったね？幸福か不幸か、災いか希望か・・・・。

終